

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

改めてまつさらな気持ちで「いい問い合わせ方を教えてください」という本書の主題に向き合います。まず考えるのは「いい問い合わせ」とは何か、です。「それ、いい問い合わせだね！」と人が感^aターンを表すとき、いつたい何がどう「いい」のでしょうか。

極めて冷淡ではありますが、一般的に大勢の方が思う「いい問い合わせ」とは内実は場面による、としか言いようがありません。例えば、ある不都合を解消したい場面における「いい問い合わせ」とは、その不都合を解決する方策を得る視点のことでしょう。何かしらの課題を解決したい場合における「いい問い合わせ」とは、その解決に役立つ問い合わせ、ボトルネックを突破するような策のことでしょう。新規事業立ち上げにおける「いい問い合わせ」とは、大勢に影響を与えるようなコンセプトのことでしょう。研究会やワークショップにおける「いい問い合わせ」とは、参加者が必死になつて考えたりワイワイ盛り上がるようなお題のことでしょう。

このようにそれぞれの場面において、「いい問い合わせ」の□①は変わり、その場面ごとに本一冊書けるぐらいのノウハウめいたものがあるわけですが、本書では、問い合わせの場面を限定せずに問い合わせのものを扱うのでそれらは他書にまかせ、それらの場面を包括した位置から問い合わせを眺めてみることにします。

さまざまな問い合わせが無数に並ぶ二次元平面。それを眺める自分。そうして各「問い合わせ」の内実に着目しないのであれば、その在り方、形式に意識を移すことになります。^①それについて何か気づくことといえば……。答えが「ある」問い合わせが「ない」問い合わせ。この二分法が問い合わせの在り方の大きな区分と言えそうです。

答えがある問い合わせというのは、パズルの最後の一ピースのようなもので、その問い合わせの目的を見事にかなえる方策なりアイデアなり、何かが確固たるものとしてある、というもののです。例えば、パソコンの電源ボタンを押しても起動しないとき、モニターとPCのケーブルが壊れたのか、電源ボタンが壊れているのか、PCの起動プログラムが壊れたのか、はたまた電源ケーブルが刺さっていないだけなのか。いずれかを試してうまく起動したなら、それが答えだったわけです。他にも運動会の一〇〇メートル走で、どうやつたら一位をとれるかという問い合わせも、直接的にそれを達成させる方策がいくつか思いつきます。それらを実施すれば一位を獲得できる確率が格段と上がるでしょう。

ああ、これらのように、すべての問い合わせに解決する直接的な方策があるのだつたら、なんと人生は容易だつたことでしたよ

う……。

どうすれば将来我が社の主軸に育つ新規事業のテーマを考えられるか？

どうすれば自分にぴったりの就職先が見つかるか？

どうすれば最愛の人と出会えるか？

どんなタイトルにすればベストセラーになるか？笑

などなど、□②□ 正解などない「問い合わせ」で人生は溢れています。^x

考えてみれば、人生そのものがそう。どうすれば幸せになるか……。なぜだかわからないけれど一回こつきりしかない人生において、□③□ 正しい答えなど見つけられるものでしょうか。

問い合わせスケールがあるという表現が許されるなら、コロッとした手のひらサイズの「今日のランチ何にしようか」から、「この世界とは何か」といった宇宙を包む壮大な問い合わせまで存在することでしょう。そしてそれら無数の大小の問い合わせは、内実は違えどすべて「問い合わせ」という点で絶対的に同じであり、そう、まるで人が問い合わせを持っているのではなく問い合わせの中に人が在るという方が両者の在り方としてしつくりきます、何から何までもが問い合わせですから。問い合わせがあるから人がある、言い換えるなら、生きていることが問い合わせである、のです。

こうやつてみると、答えがある問い合わせと答えがない問い合わせという分類は極めて些細なことのように思えます。これは、はつきりとした答えがある問い合わせの方が少ないという量的なことを問題にしたいのではなく、そもそも「問い合わせがあるからその分類もある」という端的な事実です。問い合わせなければなにも無い。すべてが「問い合わせがあるからある」のですから、これは当然のことです。つまるところ、生きることそのものが問い合わせなのですから、その生きていること、すなわち存在していることの現実、その重大さから考えれば、答えがあるとかないとかの分類はとるにたらない些細なこととも言え、先に述べた「場面ごとにいい問い合わせの内実が変わる」というのも、そんなもんだからまあそうだよね、で終わる話です。そのくらいに我々が「問い合わせ」として存在している事実は恐ろしいほどの大事です。

そうして、再度、世の中を眺めると、



「……のときはこうしたほうがいい」

「……のためにはこういう考え方をしなさい」

「……が悪いのは……だからだ」

といったように、問い合わせと同じ数だけの考え方や意見、——答えではなくあくまで意見——が世の中に溢れています。繰り返しになりますが、それらの是非など、そもそもそれは「問い合わせがあるからある」といった観点から考えてみれば、乱暴に言いますが、いずれも枝葉のことのように思えます。ましてや——少しでもマシな選択をしようとすると不^bダンなる努力の重要性は自明としつつも——きっと正しい答え、正解がある！ あるいは、自分の意見が正しい！ と過度に固執することは、「問い合わせがあるからある」の側から見れば、若干幼稚な態度だと思われます。

これが「こうだからこう、と言いつけるような断定的な意見は、インプットとアウトプットを物的に扱いすぎており、それは結果で結果をどうにかしようとしている」の謂です。考え方や意見は問い合わせがあるからあるので、その問い合わせがあることにについて考えることがより元にあるという論理は言うまでもない当たり前のことです。

ここで「いい問い合わせ」とは何か】に戻るなら、この「問い合わせがあるからある」という事実に接続される「そもそもなぜその問い合わせがあるのか」という問い合わせを問う問い合わせ。これは物事の大本に迫る問い合わせであり、それゆえこの形式こそが「いい問い合わせ」につながると考えて問題ないよう思います。

「カッコ心なところなので繰り返しますが、「なぜその問い合わせがあるのか」という問い合わせを問う問い合わせ。これは「問い合わせがあるからある」という存在そのもの、あるいは存在に触れる考え方であることであり、根底に位置するゆえに場面や条件に決して依存しません。それらの問い合わせが形成される「土台」の方なのですから、どのような問い合わせにも共通し当てはまる形式です。ある場面においてのみ「いい」と、あらゆる場面において絶対的に「いい」とはどちらが本来の「いい」かは言うまでもありません。だからこそ、どのような場面、どのような時代にも決してブレることはなく、そして、我々の歴史ではそういうものを「本質」と名付けています。

そう、あっさりと言ふなら「いい問い合わせ」とは本質的な問い合わせ。そして本質的とは、「なぜその問い合わせがあるのか」といった根源的な存在についてまで考えられているか、あるいはその根拠を踏まえて考えられているかどうかのことと言えます。

以下、順を追つてさらに仔細^yに考えます。

例えば、AさんとBさんが、「仕事」について以下のようないい問ひ（意見）を持つていたとします。

A 「いかに一つの仕事に没頭するか？ その道一筋で生きるか」

B 「兼業、副業を推進するプロジェクト型雇用をいかに常識としていくか」

この二人が意見交換すると、なかなか合意がとれないことは容易に想像ができます。当然ながら双方に長所短所があり、I.O.Tの爆発的進展等の時代情^dセイ、職種や仕事の内容、そして個々人の好み等さまざまな要因が存在するからです。結局のところ、この二人の議論において何か一つの結論なり同意なりを得るためには、場面の特定や条件の設定が必要となるのでしょう。逆に言えば、そのように環境を規定しなければ、つまり問題を小さく狭くしなければ、結論は得られません。

本書では何も意見の異なる対話の合意を得る方法を述べるつもりはなく、意見が異なるということの解釈を通じて「いい問ひ」それ自体の考察に挑みますので、先に述べた「問ひを問う」という論理形式に従うこととします。
いい問ひとは本質的な問ひ。本質的とは「なぜその問ひがあるのか」といった根源的な存在についてまで考えられているか否かですので、それぞれの問ひ（意見）が発せられた根拠に着目します。

A 「いかに一つの仕事に没頭するか。その道一筋」

(その前提) 一つの仕事に熱心になることで自分自身が磨かれるものだ。

B 「兼業、副業を推進するプロジェクト型雇用をいかに常識としていくか」

(その前提) 仕事とは自分自身の発見のことだ。幅を広げることに自己の成長がある。



それぞれの意見は、例えばこのような前提から生じたものであり、その前提とは仕事観、社会観といった、個々人がその対象に抱く考え方、観念のことです。

二人の意見交換は、この仕事観の領域まで踏み込んで議論することで、意見が平行線をたどるただの言い合いから脱し、実のある議論がなされる可能性が拡大します。この場合、Aは集中して極めるタイプで、Bはさまざまな体験から何かを見出すタイプと言えますが、いずれも仕事に対する考え方は、金銭を得るためというより□④□という傾向が共通して見受けられるからです。この点においてなら、両者が噛み合った話ができるのだと思います。

そもそもその観念までさかのぼって考えることが大切な理由は、このような合意を得るために限定されません。これまで述べてきたように、ある特定の場面でしか通じない理論や考えよりも、どのような場面でも通じる理論や考え、——この場合は仕事観といった観念——の方がより多くの事柄に影響を及ぼし得るため、我々にとつて決定的にカン心なことだからです。

例えば、ある人が「仕事とは生活費獲得のためにやるものであり、面白くなくとも辛抱してやるものだ」という仕事観を持つていたとしたら、その人の就職活動や業種選択は内容よりも収入を重視したものとなるでしょうし、また、低賃金ながらも嬉々として業務する人を理解できずに非難するかもしれません。さらには、その人が親になつた際、良きにつけ悪しきにつけ、その価値観は子供にも影響を及ぼすでしょう。

(宮野公樹『問い合わせの立て方』による。ただし一部変更した。)

問一 波線 a ~ d のカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

a
感タン

- ア タン位を修得する
イ タン願書を提出する
ウ タン当者と話す
エ タン念に調べる
オ タン錬を積む

b
不ダン

- ア ダン結して戦う
イ ダン絶していた国交を回復する
ウ ダン落を分ける
エ ダン力性が高い素材
オ ダン話室へ行く

c
カン心

- ア カン覚がなくなる
イ カン静な住宅街
ウ カン胆相照らす
エ カン大な処置を願う
オ カン通したトンネルを歩く



情セイ

ア セイ紀の大発見をする

イ セイ大な式典を開く

ウ セイ度の概要を決める

エ セイ密検査を受ける

オ セイ力範囲を広げる

問二 波線 $x \sim z$ の読みを、次の各群の中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

溢れ x あふれ y 仔細 z

ア いさい

イ きさい

ウ こさい

エ しさい

オ たさい

ア おお

イ きき

ウ ちち

エ びび

オ りり

問三 空欄①に入る最も適切なものを次のうち一つ選び、符号で答えよ。

ア 意識

イ 影響

ウ 主題

エ 都合

オ 内実

力 平面

問四

二重傍線①「それ」は、何を指すか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 答えがあるかないか
- イ さまざまあんな問い合わせの場面
- ウ 自分の着眼点や意識
- エ 問いの在り方や形式
- オ 本を書く知識や技能
- カ 無数に並ぶ二次元平面

問五

傍線①「パズルの最後の一ピースのようなもの」とあるが、これはどういう意味か。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 考えずに答えがわかるということ
- イ 答えが保証されているということ
- ウ 最後まで気を抜けないということ
- エ はじめからやり直せるということ
- オ 離れて見ると気づくということ
- カ まれに答えを見失うということ

問六

空欄②・③に入る最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

- ア あるいは イ さりとて ウ そのうえ エ たとえば オ どうして
カ とうてい キ ところが ク ところで ケ とはいえ コ なぜなら

問七

傍線②「些細なこと」とあるが、著者がそのように考える理由として、最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 意見の良し悪しを判断することの方が先行するから
 イ 正しい答えを見つけられないことの方が少ないから
 ウ 断定的な意見にこだわることの方が大切であるから
 エ 問いが問い合わせて存在していることの方が重要だから
 オ 場面ごとにいい問い合わせることの方が適切であるから
 カ 果てまで見えぬ宇宙の方が圧倒的に広大であるから

問八 傍線③「幼稚な態度」とあるが、著者がそのように考える理由を説明した以下の文の、空欄A・Bに入る最も適切なものを次の中からそれ

ぞれ一つ選び、符号で答えよ。

□ A □ にこそせまるべきであるのに、□ B □ にこだわっているから。

- ア 大本 イ 質的 ウ 出力 エ 枝葉 オ 小問
 ニ 力 条件 キ 大問 ク 入力 ケ 場面 コ 物的

問九 傍線④「いい問い合わせ」とは何か」とあるが、著者の主張を説明した以下の文の、空欄C・Dに入る最も適切なものを、次の各群の中からそ
 れぞれ一つ選び、符号で答えよ。

いい問い合わせとは □ C □ 問いのことであり、□ D □ ことができる問い合わせもある。

Cの語群

- ア 生きていることの現実の重大さまで深く考えられている
 イ それはいい問い合わせであると一般の人々にまで共通認識されている
 ウ 問いがあるからあるという事実まで形式上無視されている
 エ なぜその問い合わせがあるのか根源的なことについて考えられている
 オ 場面ごとに出てくる色々な意見の真偽まで確かめられている

力 環境や前提によつて性質が変わるため合意を得る際に利用する

キ すべての事柄に答えを与えるため生き方に指針を与える

ク 絶対的にいいと判断されるためどのような時代にも適用する

ケ 問いと考えは同意であるため考へることで人として存在する

コ 場面や条件に依存しないためより多くの事柄に影響を与える

問十 空欄④に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 自己開示
- イ 自己犠牲
- ウ 自己研鑽(きん)
- エ 自己顯示
- オ 自己責任
- カ 自己満足

問十一 以下の文章のうち、著者の考えに合致しないものを二つ選び、符号で答えよ。

ア 一般的に大勢が思う「いい問い合わせ」は、ボトルネックを突くことで課題の解決へと導くものである。

イ もし問い合わせにスケールがあると仮定すると、大小の差はあるにしても、問い合わせの点では絶対的に同じである。

ウ 人と問い合わせの在り方として、人が問い合わせを持つのではなく、問い合わせの中に人が在ると捉える方が違和感はない。

エ こうだからこうと言いつける意見は、結果をどうにかしようとして結果だけを扱っているように見える。

オ 二人の議論において何らかの結論を出すためには、さまざまな事柄を並行して同時に考へることが必要である。

カ ある人の仕事観は、本人の職業選択に大きく影響し、その子供にまで価値観が引き継がれる可能性がある。



次の文章を読み、後の設問に答えよ。

「適者生存」（ひいては自然淘汰説そのもの）にたいして、反対者から絶えず投げかけられてきた疑念がある。それは「適者生存はトートロジーではないのか」という疑念である。トートロジーとは、ある事柄を述べるのに同義語を繰り返す言葉の技法を指す。この疑念には、それがなにか論理的な詐術を含むのではないかという否定的なニュアンスが込められている。

誰が生き延びるのか？ それは、もつとも適応した者だ。では、誰がもつとも適応しているのか？ それは、生き延びた者だ。……これでは論理が循環しているではないか。まるで「すべての独身者は結婚していない」と同じではないか。これは、観察や実験によつて確かめるまでもなく正しいけれど空虚な言明、つまりトートロジーではないのか。真偽を問うこと自体が無意味であるような理論を、まともな科学理論として認める¹ことはとうていできない、「云々。進化論そのものを否定しようとする創造論者だけでなく、進化論を不完全な科学とみなす専門家も、このような非難をたびたび口にしてきた。

進化論をまる^バと否定しようとする者は、「適者」の概念が循環論的に「生存」という尺度に依存している——適者は生存する／生存するのは適者——と指摘する^甲ことで、生物進化が適応の産物だという主張を戯言として片付けようとしてきた。また、進化論は十分に科学的ではないのではないかと疑う者は、「適者」の概念が^子 A^甲的に「生存」という尺度に依存している——生存したから適者／適者だから生存した——と指摘することで、それが反証可能性（観察や実験によって誤りだと証明される可能性がある^乙）をもたない、つまり科学理論の条件を満たしていないと苦言をテイしてきただのである。

さて、「適者生存」は、実際にトートロジーなのだろうか。

現代の科学者や科学哲学者たちは、もちろんそんなことは認めない。有力な科学哲学者のひとりであるエリオット・ソーバーはこう言っている。いわく、「適者生存はトートロジーではまったくない。そもそもトートロジーになる資格があるのは命題——真または偽の性質をもつ^{ヘイ}叙文——である。しかるに、「適者生存」(survival of the fittest)は単なる熟語であり、命題どころか文ですらない。したがつて、これはトートロジーではありえない、云々。

また、現代進化論の確立に寄与した著名な生物学者で哲学的議論にも通じていたエルンスト・マイアはこう言う。トーア

(注) 創造論者：神が生物を創造したと主張する者。

トロジーは回避可能である。そもそも適者であるかどうかは、実際に生存・繁殖するかどうかとは別のことだ。たとえば双子の兄弟が散歩していて一人がたまたま落雷で死亡するケースを考えよ。自然淘汰説は検証も反証も可能であるはずだ、云々。

ふたりの言うことはもつともある。だが、おそらく「反対者を黙らせる」とはできないだろう。また、これでは問題の核心がぼやけてしまうとも思う。問題は、適者生存が論理学的な厳密な意味においてトートロジーであるかどうかとか、どのようにすればトートロジーを回避できるかということではない。疑惑のターゲットになつてるのは、「適者」(適応した者)であるかどうかは「生存」(生き延びて子孫を残したかどうか)を抜きにしては決められないという点、そのこと 자체の是非なのである。

もし反対者の言うとおりなのであれば、進化論の経験的研究は、各戸の扉を叩いて回つて実際にすべての独身者が結婚していないことを確認してまわるような不毛な^イ當為となるだろう。本当にそうなのか。

もちろんそんなことはない。どちらの非難も——進化論そのものの否定も、その科学性の否定も——当たっていないと私は考える。だがそれは、適者生存がトートロジーではないから、ではない。逆である。それはある意味でトートロジーであるからこそ有用なのだ。哲学界の鬼才・三浦俊彦はきわめて明快に述べている。「誰が適者であつたのか」という判定は、どのような表現型が相対的に多く子孫を残したか、という結果論とは独立の基準によつて決める」とはできない² のだから、「いかに予測外の者らが生き残つたとしても、結果として繁栄した者が適者、ということであり。ダーウィニズムの適応主義は、この意味で、明らかにトートロジーである」と。つづけてこう主張する。

適応主義のトートロジーこそが、生物進化に関するダーウィニズムの経験的主張を支えているのである。すなわち、適者は事後的に定義されざるをえないという」とは、^注自然選択の母集団が（あらかじめ定まつた方向への変異や組み替えではなく——引用者註）「ランダムな変異および組み替え」でしかない、という積極的事実に対応しているからである。（……）「適者」はトートロジカルに定義される他ない、というダーウィニズムの主張全体は、かくして、トートロジーではない。「適者」を結果論的トートロジカルに定義したことが、ダーウィニズムの最大の経験的データだつたのである。

(注) 自然選択：自然淘汰と同義。いずれも natural selection の訳語。

ト 適者生存はトートロジーではないと断言したソーバーも、こうした意味においてならば、進化論にトートロジー的なものが含まれることを認める。そのうえで、「進化の理論にトートロジーが含まれるという事実は、その理論全体がトートロジーであることを示しているわけではない。部分と全体を混同してはならない」と述べている。

〔B〕 の指摘は重要である。それによつてこのスローガンの役割が明確になるからだ。その役割とは、「適者」の概念に基準(criterion)を与えることだ。⁴ このスローガンは、「適者」の概念を「生存」という基準によつて定義するのである。つまり、適者生存は厳密な(論理学的な)意味ではトートロジーではないが、「適者」が「生存」の基準ないしは尺度でもつて後付け的、結果論的、循環論的に決定されるほかないという意味では、一種トートロジー的なものなのだ。

このことが進化論に広大な経験的研究⁵の沃野⁶を与えていた。というのも、この基準を用いて生物の有様を説明しようとする仮説はまったくトートロジーではない、つまり経験的に検証されるべきものであるからだ。

まず、あらゆる生物は類⁷工⁸関係にあるという基本的な考えにしてからが経験的に検証可能だし、また検証される必要がある。生物が完成品としてそれぞれ独自に発生したという可能性も考えられなくはないのだから。また、適者生存の基準を用いてつくられた個々の仮説も経験的に検証可能だし、また検証されなければならない。対象の自然や生物は仮説が想定したとおりには動いていないかもしれないからだ。

このように、トートロジー的なものとしての適者生存は、むしろ進化論(ダーウィニズム)の経験的研究を可能とする条件なのである。ある理論にトートロジー的なものが含まれているからといって、その理論体系の全体がトートロジーであると速断してはならない。〔C〕とは、このような意味である。

ひょっとすると、こうした見方に同意できない進化論のヨウ護者もいるかもしれない。自然淘汰説はいかなる意味でもトートロジーを含まないのだと反論することも可能だろう。しかし、適者生存が「適者」を定義するための基準であり、そのかぎりにおいてトリヴィアルな意味でトートロジーのようなものだと認めたからといって、それほど不都合があるとは思われない。むしろ、このことを根拠に進化論の全体をトートロジーだと断することこそ論理的詐術にほかならないのだ、そう安んじて主張できるようになるのではないだろうか。

ともかく、適者生存の原理はこのようにして、生物の有様がいかにもたらされたのかを説明する進化論という科学研究の一部分をなす。それを一種のトートロジーだとみなすことは、必ずしも進化論の否定やその科学性の否定をもたらすものではない。それは進化論をおとしめるどころか、むしろその可能性を最大限に評価することにつながるのだ。進化論に

かんする誤解を取り除くのは重要な仕事だが、だからといって産湯とともに赤子まで流してしまったことはないと思う。

(吉川浩満『理不尽な進化 増補新版——遺伝子と運のあいだ』による。ただし一部変更した。)

問一 波線イヽハの漢字の読みをひらがなで答えよ。

問二 破線甲・乙のカタカナを漢字に直した場合と同一の漢字が含まれるもの次のなかからそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

甲 テイ ア 何とか原稿の執筆契約をテイケツすることができた。

イ 『人権侵害』としてのトテイ奉公』というタイトル案に編集長は難色を示した。

ウ 主任はスケジュールどおりの刊行について早くもテイネンを抱いた。

エ 著者がまた原稿にテイセイを加えたいと言い出した。

オ 出版記念パーティーで粗品をシンディイした。

乙 ヨウ ア ヨウゴ施設のリフォームと耐震補強工事が次の仕事だ。

イ 頻繁なシヨウ变更は工期の延長と費用の増加をもたらした。

ウ 営業部の連中には「顧客に対するホウヨウリヨクを我々にも向けて欲しい」と言いたい。

エ 無茶な要求をきつぱり断り、意気ヨウヨウと現場に戻った。

オ 現場を外されたと妻に伝えると、そつとホウヨウされた。

問三 二重傍線子・丑のカタカナに該当する漢字の説明として最も適切なものを次のなかからそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

子 ヘイ叙 ア 「あわせる」、「あつめる」という意味を持ち、「叙」と組み合わせて、一つの叙述が多義を持つという意味で使われている。

イ 「ならべる」、「なみ」という意味を持ち、「叙」と組み合わせて、普通一般的の意味で述べるという意味で使われている。

ウ 「たいら」、「ひらたい」という意味を持ち、「叙」と組み合わせて、ありのままに述べるという意味で使われている。

エ 「わるい」、「つたない」という意味を持ち、「叙」と組み合わせて、用語が適切でないために叙述が誤解を招きやすいという意味で使われている。

オ 「じじる」、「しめる」という意味を持ち、「叙」と組み合わせて、主語と述語を備え、構造上、文として完結しているといふ意味で使われている。



丑　類エン　ア　「のびる」、「ひろがる」という意味を持ち、「類」と組み合わせて、似通った形状・性質のものが広い範囲に分布するという意味で使われている。

イ　「えにし」、「まつわる」という意味を持ち、「類」と組み合わせて、互いの形状・性質などが近い関係にあるという意味で使われている。

ウ　「なまめかしい」、「したう」という意味を持ち、「類」と組み合わせて、形状・性質がよく似ているものを好むという意味で使われている。

エ　「ひく」、「たすける」という意味を持ち、「類」と組み合わせて、同族を助けるという意味で使われている。

オ　「そう」、「ふち」という意味を持ち、「類」と組み合わせて、昔から形状・性質に変化がないという意味で使われている。

問四　空欄Aに入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　創造論　イ　動機論　ウ　結果論　エ　因果論　オ　水掛論

問五　傍線1「否定的なニュアンス」とあるが、反対論者は、トートロジーのどのような点に否定的なニュアンスを見出すのか。その説明として最も適切なものを次のの中から一つ選び、符号で答えよ。

ア　トートロジーが、批判者との議論を打ち切るための常套手段として悪用されてきた点

イ　トートロジーが、同義語の繰り返しだから論理的な説明になつていながら論理的な説明になつていないにもかかわらず、論理的な説明であるかのような錯覚を抱かせる点

ウ　トートロジーが、批判者に、より深刻な論理的破綻を気づかせないための、目立つおとりとして多用されてきた点

エ　トートロジーが、言明の真偽を不明確にして、その論理的破綻を誤魔化すために用いられてきた点

オ　トートロジーが、同義語の繰り返しにより、主張の論理がもつ本来の説得力以上のものを与える技法である点

問六

傍線2 「[適者]（適応した者）であるかどうかは「生存」（生き延びて子孫を残したかどうか）を抜きにしては決められないということ、そのこと自体の是非」とあるが、その是非についての著者の考え方として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 正しい。「生存」が「適者」を選別する基準であるということが重要であつて、それが生物進化論の経験的研究に発展可能性を与えている。

イ 正しい。「適者」は「生存」を抜きにしては決められないということはトートロジーであるが、そのことを正面から認めることによって、反対者からの非難を未然に防ぐものである。

ウ 正しくない。「生存」という基準によつて「適者」を定義する適者生存の原理は一種のトートロジーであつて、進化論の否定やその科学性の否定をもたらすものである。

エ 一部は正しく、一部は正しくない。「適者」は「生存」を抜きにしては決められないことが、経験的研究を可能とする条件であることは正しいが、理論体系全体がトートロジーとなる可能性をもたらすことは正しくない。

オ 不明。「適者」は「生存」を抜きにしては決められないということはトートロジー的なものであつて、そのことによつて理論体系全体がトートロジーとなるかどうかは即断できないので、評価は今後の展開をみなければ下すことができない。

問七 傍線3 「トートロジー的なもの」とあるが、トートロジーではなく「トートロジー的なもの」という表現になつてゐる理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア ソーバーは、適者生存のトートロジーを回避可能だと考えているので、トートロジーと表現するわけにはいかなかつたから

イ 「適者生存」は、命題ではないという点で論理学上のトートロジーではないが、「適者」が「生存」によつて事後的、循環論的に決定される点でトートロジーの特徴を有するから

ウ 進化論全体はトートロジーではないので、適者生存についてもトートロジーと表現することができないから

エ トリヴィアルなトートロジーであつて、進化論全体に影響を及ぼすものではないから

オ トートロジーだと断言してその後の論証で不利になることを避けるために、あいまいな表現を採用したから

問八 空欄Bに入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 創造論者

イ 進化論を不完全な科学とみなす専門家

ウ ソーバー

エ マイア

オ ダーウィン

カ 三浦俊彦

問九 傍線4「このスローガン」とあるが、これが指す内容を四字（記号は一字と数える）で正確に抜き出せ。

問十 傍線5「経験的研究」とあるが、その意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 研究者の個人的体験に基づく研究

イ 経験から得られた知識を論理的思考で批判する手法の研究

ウ 仮説の検証に経験から得られた知識を用いる手法の研究

エ 論理的思考よりも経験から得られた知識を重視する研究

オ 経験から得られた仮説を論理的思考で正当化する手法の研究

問十一 空欄Cに入る十五字（句読点及び記号は一字と数える）の語句を本文から抜き出し、最初と最後の三文字を答えよ。

問十二 傍線6「進化論という科学研究」とあるが、その科学性を最終的に担保するものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 反証可能性

イ 経験的研究

ウ トートロジー

エ 哲学的議論

オ 観察や実験

問十三

「適者生存はトートロジーではないか」という疑念に関する次の文章を読み、本文の内容に合致するものにはアを、合致しないものにはイを答えよ。

- a 創造論者は、「適者」と「生存」が循環論に陥っていることを論理的詐術だとして、進化論そのものを全否定する。
- b 「適者生存」は熟語であつて文ではないのでトートロジーにあたらないという見解は、形式的には正しくとも、本質的には「適者生存」がトートロジーであることの有用性を否定するものなので誤りである。
- c 進化論の科学性を疑問視する専門家は、「生存」した者が「適者」となる結果、適者か否かを観察や実験によつて検証できることから、進化論を科学理論としては不十分だと考えている。
- d 進化論の科学性に対する専門家の非難は、適者生存が真偽を問うこと自体無意味なものであることを非難しているのであって、それが同義語反復であることを非難しているわけではないから、厳密にいえば、トートロジーを非難しているわけではない。
- e 落雷のような偶然の事情によつて個々の生物の生死が左右されるケースはそもそも「適者生存」の想定外であるから、「適者生存はトートロジーではないか」という疑念に対する反論とはならない。